

詩仙堂

Shisendo

史跡 詩仙堂 丈山寺

<http://kyoto-shisendo.com/>

スタート

修学院離宮道
市バス5号系統
【京都駅～岩倉橋車場】
京都駅から58分、国際会館前駅から9分
市バス31号系統
【西条烏丸～岩倉橋車場】
西条河原町から31分

徒歩4分

- 1 修学院離宮
しやうがくいんのりきゅう
- 2 曼殊院門跡
まんじゆいんのもくし
- 3 龍光寺
りゅうこうじ
- 4 詩仙堂
しせんどう

徒歩2分
徒歩20分
徒歩2分
徒歩10分

ゴール

一乗寺下り松町
いちじょうじのりまつちやう
市バス5号系統
【京都駅～岩倉橋車場】
京都駅まで47分、国際会館前駅まで13分
市バス北8号系統
【一乗寺下り松町～北大路バスターミナル】
松ヶ崎駅まで10分



しやうがくいんのりきゅう・まんじゆいん・しせんどう

修学院離宮・曼殊院・詩仙堂

比叡山麓
静かな山辺の道
名庭をたどる

古来、文人や貴人の隠棲の地だった洛北の比叡山麓。究極の日本庭園と評される修学院離宮は事前に申し込みが必要だが、一度は訪れたい場所。後水尾上皇がみずから造営した壮大な敷地に3つの離宮が配され、高低差を生かした庭園は圧倒的なスケール。ゆるやかな坂道を歩き、曼殊院へ。建築美と庭園美で知られる雅な門跡寺院だ。のどかな丘陵地を下ると住宅地に小さな寺社が点在するエリア。学問所として栄えた圓光寺は秋には華やかな錦繡に染まる。詩仙堂は四季折々の草花と春のサツキが彩る庭園が見ものだ。

のどかな自然のなかに
隠棲した貴人たちの
風雅な世界を垣間見る

石川丈山は、隸書、漢詩の大家であり、わが国における煎茶（文人茶）の開祖であった。

丈山は、家康に仕え武勲をたてただけでなく、平素から読書に親しみとくに詩を好みました。三十三歳で隠退後は藤原惺窩について朱子学をおさめ、駿河清見寺の説心和尚に禅を学び、五十九歳で詩仙堂を造営し、没するまでの三十余年を、清貧の中に聖賢の教えを自分の勤めとし、詩や書や作庭に寝食を忘れてこれを楽しんだ風雅な文化人でもありました。

その庭は当時でも代表的な名園でしたが、後世修理が加わった今でもこの趣をそこなうことなく現代に引き継がれています。

詩仙堂には様々な文献や書などが遺されており、ホームページ上では全て御紹介しきれませんが、通常展示以外に、毎年、五月二十三日の丈山忌後の五月二十五日から三日間は「遺宝展」としての特別展示などの行事も行っています。

古くから文人や貴人に愛されてきました比叡山山麓の洛北は、究極の日本庭園と言われます修学院離宮を筆頭に曼殊院や詩仙堂という古刹があります。

詩仙堂は、四季折々の草花で人を和ませてくれます。とりわけ春はサツキが庭園を彩り、赤毛氈の部屋からも楽しめます。

今回は、一乗寺駅より歩いてみました。まだ桜には少々早い季節でしたが、それだけに人も少なく、のんびりと旅を楽しむことができました。

詩仙堂公式サイトによりますと、下記のように紹介されています。

石川丈山は、隸書、漢詩の大家であり、わが国における煎茶（文人茶）の開祖であった。

丈山は、家康に仕え武勲をたてただけでなく、平素から読書に親しみとくに詩を好みました。三十三歳で隠退後は藤原惺窩について朱子学をおさめ、駿河清見寺の説心和尚に禅を学び、五十九歳で詩仙堂を造営し、没するまでの三十余年を、清貧の中に聖賢の教えを自分の勤めとし、詩や書や作庭に寝食を忘れてこれを楽しんだ風雅な文化人でもありました。

毎年、五月二十三日の丈山忌後の五月二十五日から三日間は「遺宝展」としての特別展示などの行事も行っています。

正式には「**凹凸窠**（穴編に果）」（おうとつか）」で、でこぼこした土地に建てた住居という意味です。この「凹凸窠」の中心には、中国の漢晋唐宋の詩家三十六人の肖像を狩野探幽に描かせ、頭上にそれら各詩人の詩を丈山自ら書いて四方の壁に掲げた”詩仙の間”を中心としているところから「詩仙堂」とよばれています。

古くから文人や貴人に愛されてきました比叡山山麓の洛北は、究極の日本庭園と言われます修学院離宮を筆頭に曼殊院や詩仙堂という古刹があります。

詩仙堂は、四季折々の草花で人を和ませてくれます。とりわけ春はサツキが庭園を彩り、赤毛氈の部屋からも楽しめます。

今回は、一乗寺駅より歩いてみました。まだ桜には少々早い季節でしたが、それだけに人も少なく、のんびりと旅を楽しむことができました。

詩仙堂の入り口に立つと「史蹟詩仙堂」の碑があり、山茶花の樹影下に小さな門がある。この門が「小有洞（しょうゆうどう）」で、扁額に「小有洞」の文字があります。

昼なおほのぐらく、わずかに光がもれる。

石段をのぼりつめると、やや開け、石を敷いた小道に出ました。その突きあたりに、左に登る石段が見えます。

上り詰めたところ右に老梅関があり、「梅関」の扁額が揚げられています。
老梅関の右手には凹凸か（おうとつか）があります。

玄関はやや低く、丈山が蜂のように腰をかがめて出入りしたので「蜂腰（蜂要とも書く）」があります。

玄関より座敷半山林出ますと、前方に庭が開けます。この座敷の奥には丈山の遺品が飾られ、鴨居には僧都予が掲げられています。

この座敷の脇に「詩仙堂」という小部屋があります。壁には獅子が子を谷に落とす図のある扇形の壁間窓があります。その上方に、中国の詩人三十六人の画像および詩の額が四周に掲げられています。

その詩人の詩を、丈山自ら書いて四方の壁に掲げた”詩仙の間”を中心としているところから「詩仙堂」とよばれています。

赤絨毯の玄関側となりが「獵芸巢(至楽巢)」という読書室です。そこから「嘯月楼」という堂楼に上ることができます。月に向かって朗吟する所です。

至楽巢の前より庭に下り立ってみると、まず、すぐ左手に小滝「洗蒙瀑」があります。蒙昧を洗い去る滝の意で、東山より引いた清冽な水が石を打っています。この水は、紅葉を浮かべて下方の庭に繋がっています。

詩仙堂の庭は、丈山好みの唐様庭園として、当時も、代表的な名園であったようです。

これを 流葉はく(さんずいに陌) という。
はく(さんずいに陌)とは、泊で、水の浅い意である。付近の坂の小道脇の苜蓿も美しい。

ここに百花を配したので 百花塙 という。
塙とはどての意である。

ししおどし「僧都」が、庭園のどこでも聞こえました。農夫が猪や雀をおどすために考えたもので、この地が山麓にあるので、鹿や猪が庭を荒らすのを防ぐために設けられたようです。

静かな佇まいの離れ「残月軒」とその前庭

ここからモミジや桜を見ることができ、夜には月も眺められるそうです。



information

詩仙堂について



凹凸窠、その後の詩仙堂 など歴史について

[詳細へ](#) 

石川丈山について



丈山の家系、幼時から一乗寺村隠棲と晩年まで

[詳細へ](#)

御本尊



詩仙堂丈山寺の御本尊である馬郎婦観音

[詳細へ](#)

三十六詩仙



詩仙堂とよばれる様になった三十六詩仙とは

[詳細へ](#)

書物



詩仙堂記、凹凸窠十二景、など書物を紹介

[詳細へ](#)

展示物



詩仙堂遺宝など展示物についての紹介

[詳細へ](#)

年表



詩仙堂に関する時系列の年表

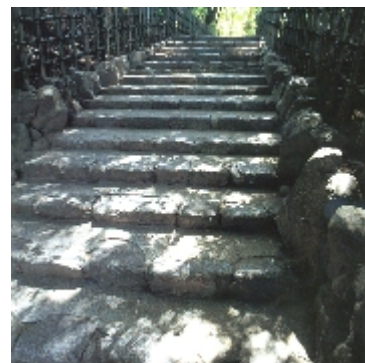
[詳細](#)

凹凸窠（おうとつか）

凹凸窠十境

いま、詩仙堂とよばれているのは、正しくは凹凸窠であり、詩仙堂はその一室である。凹凸窠とは、でこぼこした土地に建てた住居というほどの意である。丈山はここに十境を見たてた。

まず、詩仙堂の入り口に立つと「史蹟詩仙堂」の碑があり、山茶花の樹影下に小さな門がある。



これが **小有洞（しょうゆうどう）** であり、扁額に「小有洞」の文字がある。

門を入ると十数段の石段をのぼる。両側の竹林のために、昼なおほのぐらく、わずかに光がもれる。

石段をのぼりつめると、やや開け、石を敷いた小道に出る。その突きあたりに、左に登る石段が見える。



この石段を登り詰めたところに **老梅関** があり、「梅関」の扁額が揚げられてある。ここに老梅数珠があったので、かく名付けられた。

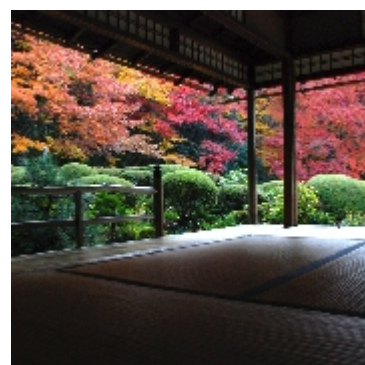
老梅関の右手には **凹凸窠門** がある。

老梅関に入ると、玄関がある。

これを **蜂腰（蜂要とも書く）** という。この玄関はやや低く、丈山が蜂のように腰をかがめて出入りしたので、かくよんだ。

その右脇の雲形の窓は、趣向をこらしたものである。

玄関より座敷半山林出ると、前方に庭が開ける。この座敷の奥には丈山の遺品が飾られ、鴨居には僧都予が掲げられている。



この座敷の脇に **詩仙堂** がある。

壁には獅子が子を谷に落とす図のある扇形の壁間窓があり、その上方に、中国の詩人三十六人の画像および詩の額が四周に掲げられている。

雅致ある廊下づたいに、隣の部屋へ行くと、ここは **猊芸巢(至楽巢)** という読書室である。
興至れば堂上の楼に上り、月に向かって朗吟する。

これを **嘯月楼** という。

至楽巢の脇に **膏肓泉** がある。
膏肓とは、薬も効かぬ所という意で、深い井戸のことである。

井戸の脇に **躍淵軒** がある。
これは、侍童の間で、侍童が将来淵に躍る鯉のようになるようとの意で、嘯月楼からすぐ北側下に見える。



嘯月楼から庭を見渡すのは、この境地を別の角度から鑑賞するものとして、趣のあるものである。

至楽巢の前より庭に下り立ってみると、まず、すぐ左手に **洗蒙瀑** がある。
蒙昧を洗い去る滝の意で、東山より引いた清冽な水が石を打つ。この水は、紅葉を浮かべて下方の庭に流れる。

これを **流葉はく(さんずいに陌)** という。
はく(さんずいに陌)とは、泊で、水の浅い意である。付近の坂の小道脇の苅込も美しい。



ここに百花を配したので **百花塙** という。
塙とはどての意である。

その下かげに **僧都** がある。
僧都はまた添水の時を当てる。古今集にある「山田の僧都」というごとく、農夫が猪や雀をおどすために考えたもので、この地が山麓にあるので、鹿や猪が庭を荒らすのを防ぐために設けられたものである。



近時、庭の一隅に茶室を設けた。茶室から庭を通して前方の小山を見るのも。雅致のあるものである。庭と小山との境には、小川が流れている。小川の向うの小山に散り敷く落葉を分て散策するのも、また楽しいものである。

詩仙堂の庭は、丈山好みの唐様庭園として、当時の代表的な名園である。

丈山は作庭にもすぐれた手腕を持ち、桂離宮、枳殻邸(涉成園)の補修には、丈山の手が加わっているといわれる。



この庭は、後世修理が加わり、必ずしも昔のままではない。それにしても、庭の樹木の美しさと、岩を打つ滝の音、そうして僧都の叩くのだかな響きは、よく調和してこの山荘の閑寂を更に幽ならしめている。

丈山はこの他、燕所(安息所)をはい(草冠に過)軸軒、寢室を白室、書棚を剔蛭(紙虫をえぐる意)などと名付けている。